なでしこリーグの発展に関する研究～大学女子サッカーに焦点をあてて～

Study on the development of Nadeshiko league

～Focus on university women’s football～

1K08B034-0　　臼井　理恵

指導教員　主査　平田竹男先生　　副査　中村好男先生

【研究目的】

なでしこジャパンが２０１１年７月のワールドカップで優勝し世界一になってから、マイナースポーツであった女子サッカーの認知度は急激に高まっている。しかしなでしこリーグはプロではなく、各クラブに所属する選手はアマチュア選手である。プロ選手は数名のみで、学生を除くほとんどは仕事先からの給料を元に、あるいはアルバイトをしながら生活している選手である。女子サッカー選手としての収入がなく、仕事をして生活を成り立たせる日本では女子サッカー選手が職業として成り立つには難しい現状がある。女子サッカーの現状が原因で、なでしこリーグでプレーすることを選択出来ずに第一線から身を引く高校生や大学生が多い実情は女子サッカーの発展においてマイナスである。以上のことから本研究では、大学女子サッカーの取り組み及び現状を調査し明らかにして、大学女子サッカーが発展していく為の施策を提言することを目的とした。

【方法】

大学女子サッカーの取り組み及び現状を明らかにし、大学女子サッカーが発展していく為の施策を提言する為に、①大学女子サッカーの変遷整理と現状分析②ユニバーシアード競技大会の変遷と概要の整理③なでしこリーグと大学女子サッカーの関係分析を行った。具体的にはインターネット、書籍、雑誌記事、大会パンフレットによる文献や資料を用いた。

【結果】

大学女子サッカーは選手数及びチーム数の視点からどのカテゴリーよりも規模が小さいことが分かった。大学女子サッカーを地域別に内訳すると、選手数及びチーム数、競技レベル、なでしこリーガーの輩出数、なでしこジャパンへの輩出数、ユニバーシアード競技大会への輩出数、などにおいて全て関東地域が圧倒しており、大学女子サッカーの中心は関東であることが分かった。その一方で大学女子サッカーは地域毎の環境の差とチーム毎の実力差が大きいことも分かった。

２００３年テグ大会から２０１１年深セン大会までの５大会におけるユニバーシアード競技大会の出場選手と結果を調査すると、大学女子サッカー選手の多少と結果の良し悪しは関係ないことが分かった。またユニバーシアードに出場した後、なでしこジャパンに選出された選手数はなでしこリーガーが１０名、大学女子サッカーが９名とほぼ同数であったことから大学女子サッカーの競技レベルの高さを伺うことが出来る。

大学女子サッカーとなでしこリーグの関係について、ユニバーシアード５大会において最も多くの選手数を輩出していた早稲田大学が、実は最もなでしこリーグを選択しないことが分かった。また、関東、関西、中国地域以外の大学チームからなでしこリーグのチームに所属している選手は現在１名もいないことも分かった。なでしこリーグに属する岡山湯郷ベルの２０１０年度の経営データを見ると、これからいかにチケット収入と入場料収入を高めていくかが課題であると分かった。

【考察】

大学女子サッカーの規模が小さい原因として、なでしこリーグがプロでないことと中学生年代のプレー環境の不整備が考えられる。

まず、アマチュアであるなでしこリーグは大学に通いながらプレー出来る為、大学チーム所属にこだわる必要がないのである。次に小学生年代には１万人以上いる女子選手が、中学生年代になるとその半分以下に減少してしまう現状がある。中学生年代のプレー環境の改善は、直接的に他の年代の環境改善にも繋がっていくと考えられることから、大学女子サッカーの規模拡大には、中学生年代のチーム数の増加、特に部活動におけるチーム数の増加が必要であると考えられる。

ユニバーシアードにおける早稲田大学の例から、競技レベルの高い選手でさえ第一線でプレーしない理由は、なでしこリーグを選択するより一般企業に勤める方が安定した生活を送れるからであると考えられる。女子サッカー発展の為には、代表レベルの選手でさえ続ける決断に至らないなでしこリーグの環境改善が必要である。リーグの環境が改善されれば、大学女子サッカーを選択する高校生が増え、卒業後の進路としてなでしこリーグを選択する優秀な選手も増え、リーグの競技レベルが高まる。リーグの競技レベルが高まれば、なでしこジャパンの競技レベルも高まる。なでしこジャパンが国際大会で活躍すれば、メディアで露出する機会も増え、世間から多くの注目を集められるようになる。注目を集めると、普及と資金獲得に繋がり、強化に力を入れられる。このような好循環が生まれれば、大学女子サッカーも確実に発展していくと考えられる。現在の日本はまさに好循環が生まれようとしており、確かなサイクルにする為には、２０１２年のロンドンオリンピックの結果が重要であると考えられる。